

岩森先生の健康への提言（基礎理論から臨床実際まで）

医学博士 包向陽 編著

总体調整療術

中国医薬科技出版社

岩森先生の健康への提言

総体調整療術

(基礎理論から臨床実際まで)

黒龍江中医薬大学医学博士

包向陽 編著

中国医薬科技出版社

登記証号:(京)075 号

圖書在版編目(CIP)数据

總体調整療術:日文/包向陽 編著. —北京:中
国医藥科技出版社,1996.8

ISBN7-5067-1477-9

I. 總…

II. 包…

III. 總体療術(中医)-結合-中医生理学-日本-診療-日文

IV. R244.1

中国版本圖書館 CIP 数据核字(95)第 16457 号

中国医藥科技出版社

(北京海淀区文慧園北路甲 22 号)

(郵政編碼 100088)

北京市昌平精工印刷所 印刷

全国各地新華書店 經銷

開本 787×1092¹/₁₆ 印張 21¹/₄

字数 486 千字 印数 1—1000

1996 年 8 月第 1 版 1996 年 8 月第 1 次印刷

定價:150 元(RMB)

目 次

第一篇 総体療術の基礎理論 (1)

第一章 陰陽学説 (1)

第一節 陰陽の概念と相互関係 (1)

一、陰陽の概念 (2)

二、陰陽の相互関係 (4)

第二節 陰陽学説の中医学における応用 (4)

一、人体の臓腑、器官、組織の解釈 (4)

二、人体の生理機能の解釈 (4)

三、人体の病理変化について (4)

四、病気の診断について (5)

五、調整の原則と手法を決める根拠 (5)

第二章 臓腑学説と臓腑弁症 (6)

第一節 臓腑学説 (6)

一、臓 (6)

二、腑 (9)

三、奇恒の腑 (9)

第二節 臓腑弁症 (10)

一、心の病症 (10)

二、肝の病症 (12)

三、脾の病症 (13)

四、肺の病症 (14)

五、腎の病症 (15)

六、心胞の病症 (15)

七、小腸の病症 (15)

八、胆の病症 (16)

九、胃の病症 (16)

十、大腸の病症 (17)

十一、膀胱の病症 (17)

第三章 経絡学説 (18)

第一節 経絡とその分類、流注 (18)

一、十二経脈	(18)
二、奇経八脈	(18)
三、経絡の分類	(19)
四、経脈の流注順序	(19)
第二節 十四経脈の体表における分布概況	(20)
一、四肢	(20)
二、軀幹	(20)
三、頭部、顔面部と頸項部	(20)
第三節 経絡の作用	(21)
一、温養、連係の作用	(21)
二、感応、伝導の作用	(21)
三、疾病の診断の指導	(22)
四、疾病の治療の指導	(22)
第四節 経絡弁症	(23)
一、十二経脈の病候	(23)
二、奇経八脈の病候	(24)
付録：八綱弁症	(24)
一、表裏	(24)
二、寒熱	(24)
三、虚実	(25)
四、陰陽	(26)
第四章 人体の外形、部位と骨格系	(27)
第一節 人体の外形と部位	(27)
第二節 人体の骨格系	(29)
一、骨の構造	(29)
二、人体の各部の骨格	(30)
第五章 人体の筋系	(41)
第一節 筋とその作用	(41)
一、筋の構造	(41)
二、筋の起始と付着	(41)
三、筋の作用	(41)
第二節 人体各部の筋	(43)
一、頭部の筋	(43)
二、頸部の筋	(44)
三、背部の筋	(45)
四、胸部の筋	(46)
五、腹部の筋	(47)
六、上肢の筋	(48)

七、下肢の筋	(50)
第六章 人体の脊髄神経と自律神経系	(54)
第一節 人体の脊髄神経系	(54)
一、脊髄神経の後枝	(55)
二、脊髄神経の前枝	(55)
第二節 人体の自律神経系	(60)
一、交感神経系	(61)
二、副交感神経系	(63)

第二篇 奇特な腹部総体療法及びその他臨床経験 (66)

第一章 腹部総体療法の概況	(66)
第一節 腹部総体療法の手技	(66)
一、調整部位	(67)
二、調整手技	(67)
第二節 腹部総体療法の適応症と調整	(67)
一、五臓六腑の病気及びその施術部位	(67)
二、外感熱病及びその施術部位	(68)
三、各系の適応症及びその調整	(69)
第二章 腹部総体療法の整体観念、陰陽、臟腑学説との関係	(70)
第一節 腹部総体療法の整体観念	(70)
第二節 陰陽偏勝の場合	(71)
一、陰偏勝の場合	(71)
二、陽偏勝の場合	(72)
第三節 陰陽偏衰の場合	(72)
一、陰偏衰の場合	(73)
二、陽偏衰の場合	(73)
第四節 陰陽学説は総体療術の指導理論	(73)
第三章 腹部総体療法の解剖学と生理学的基礎	(74)
第一節 胃	(75)
一、胃の位置	(75)
二、胃の動脈	(75)
三、胃の神経	(76)
四、胃のリンパ管	(77)
第二節 十二指腸	(77)
一、十二指腸の位置	(77)

二、十二指腸の血液循環	(78)
第三節 小腸	(79)
一、受盛化物を主る	(79)
二、清濁を分別する	(80)
第四節 大腸	(80)
一、糟粕の伝導を主る	(80)
二、津を主る	(81)
第五節 膀胱	(81)
第六節 三焦	(81)
一、三焦の生理機能	(82)
二、三焦のそれぞれの機能特徴	(82)
付 録	
一、腹部総体療法の触れ付ける臓腑と調整作用	(82)
二、「腹部の九分法」の腹部総体療法における応用	(84)
第四章 腹部総体療法の経絡学と腧穴学的基础	(86)
第一節 腹部での経絡とその循行	(86)
一、任脈	(86)
二、足少陰腎経	(87)
三、足陽明胃経	(87)
四、足太陰脾経	(87)
五、足厥陰肝経	(87)
六、足少陽胆経	(87)
第二節 腹部での腧穴とその主治病症	(88)
一、任脈上の腹部における腧穴とその主治病症	(89)
二、足少陰腎経上の腹部における腧穴とその主治病症	(90)
三、足陽明胃経上の腹部における腧穴とその主治病症	(91)
四、足太陰脾経上の腹部における腧穴とその主治病症	(92)
五、足厥陰肝経上の腹部における腧穴とその主治病症	(93)
六、足少陽胆経上の腹部における腧穴とその主治病症	(93)
第五章 腹部総体療法の腑を通じて全身を調整する機序	(94)
第一節 五臓六腑とその生理機能	(94)
一、五臓とその生理機能	(94)
二、六腑とその生理機能	(94)
第二節 五臓六腑の整体関係	(95)
一、臓腑の間の表裏関係	(95)
二、五臓と形体官竅の関係	(95)
三、五臓の生理活動と精神情志との関係	(95)
第三節 六腑と五臓との関係及び病症	(95)

一、小腸と心	(95)
二、胆と肝	(96)
三、胃と脾	(97)
四、大腸と肺	(98)
五、膀胱と腎	(100)
第六章 胃下垂の病理変化とその臓腑にもたらす影響	(104)
第一節 胃の位置と機能の変化	(104)
一、胃の位置	(104)
二、胃下垂の原因	(104)
三、胃下垂の症状	(105)
第二節 胃下垂による大腸と小腸の二次的な病理変化	(106)
一、生理位置が変化する	(106)
二、腺体の分泌機能が失調する	(107)
三、血管と神経が障害される	(107)
第三節 胃下垂による膀胱と子宮の二次的な病理変化	(109)
一、膀胱にもたらす影響	(109)
二、子宮にもたらす影響	(109)
第四節 胃下垂による肝臓の二次的な病理変化	(110)
一、肝臓の機能と循環	(110)
二、胃下垂の肝臓にもたらす影響	(110)
第五節 胃下垂による全身の二次的な病理変化	(111)
一、血液の機能	(111)
二、血液の生成経過	(112)
第七章 総合腹部式総体療術協会による腹部と胃下垂についての学術検討	(113)
第一節 腹部総体療法の創造人の講演	(114)
一、岩森会長先生の講演	(114)
二、84才高齢の安石義雄針灸師の講演	(117)
第二節 胃下垂についての検討	(118)
一、胃の位置	(118)
二、胃下垂とは	(119)
三、胃下垂による人体への影響	(119)
四、胃下垂は病の元	(120)
五、胃の下垂する場所と牽引について	(121)
第三節 胃下垂の調整	(122)
一、腹部の重要性	(122)
二、胃下垂の調整についての考え	(122)
三、施術についての裏付け	(123)
四、施術後について	(124)

五、肝炎について	(125)
六、血液	(125)
第四節 日常生活では.....	(126)
一、人体について	(126)
二、家庭療法	(127)
三、“栄養不足”について	(128)
付 録:飲食物の注意と打撲症について	(128)
一、飲食物の注意	(128)
二、飲食物の一般知識	(133)
三、打撲症について	(134)
第八章 岩森穴と臍についての検討.....	(134)
第一節 岩森穴の新発明.....	(134)
一、岩森穴 1	(134)
二、岩森穴 2	(135)
三、岩森穴 3	(135)
第二節 岩森穴についての考察.....	(137)
一、経絡と穴の分布について	(137)
二、穴とその治療作用について	(137)
第三節 臍と臍の位置についての検討.....	(140)
一、臍は人体の大事な所	(140)
二、臍の主治作用	(142)
三、臍を主穴として行う治療	(142)
四、臍での操作技術	(143)
第四節 臍の位置とその臨床意義.....	(143)
一、臍は人体の中心点	(143)
二、臍の位置を測る方法	(144)
三、臍の位置の臨床意義	(145)
第九章 骨盤と脊柱及びその調整.....	(146)
第一節 骨盤と骨盤の調整.....	(146)
一、骨盤の構成とその狂い	(146)
二、骨盤変位の発生	(147)
三、骨盤変位によって起こる病気	(147)
四、骨盤変位の検査と診断	(148)
五、骨盤変位の調整	(150)
六、骨盤調整法の臨床での応用	(151)
第二節 脊柱と脊柱弯曲の調整.....	(152)
一、脊柱の構成	(152)
二、脊柱弯曲の病因	(152)

三、脊柱弯曲の臨床	(153)
-----------------	-------

第三篇 臨床の基本的知識 (160)

第一章 総体療術の医療保健作用	(160)
第一節 皮膚に対する調整作用	(161)
第二節 筋肉に対する調整作用	(162)
第三節 骨と関節に対する調整作用	(163)
第四節 血管循環に対する調整作用	(164)
第五節 神経系統に対する調整作用	(165)
第六節 臓腑に対する調整作用	(165)
一、心臓に対する調整作用	(165)
二、肝臓に対する調整作用	(166)
三、肺と気管に対する調整作用	(166)
四、胃腸に対する調整作用	(167)
五、腎臓に対する調整作用	(167)
第二章 総体療術の常用手法	(168)
第一節 基本的手法	(168)
一、滾法	(168)
二、一指禅推法	(168)
三、按法	(169)
四、摩法	(170)
五、揉法	(171)
六、压法	(172)
七、関節活動法	(173)
八、伸展法	(174)
九、推法	(175)
十、拿法	(175)
第二節 一般手法	(177)
一、捏法	(177)
二、搓法	(177)
三、撥法	(178)
四、点压法	(179)
五、拍打法	(180)
六、振動法	(180)
七、顫動法	(181)

八、回転法	(182)
第三章 総体療術の全身的調整手法.....	(183)
第一節 上肢での調整手法.....	(183)
一、手部での調整手法	(183)
二、肘部での調整手法	(187)
三、肩部での調整手法	(189)
第二節 下肢での調整手法.....	(194)
一、下肢の前面での調整手法	(194)
二、下肢の後面での調整手法	(201)
三、臀部での調整手法	(204)
第三節 腰背部での調整手法.....	(206)
一、腰背部での調整手法	(206)
二、腰部での調整手法	(210)
第四節 胸腹部での調整手法.....	(211)
一、胸部での調整手法	(211)
二、腹部での調整手法	(214)
第五節 頭部と頸部での調整手法.....	(217)
一、仰臥位での調整手法	(217)
二、坐位での調整手法	(220)
三、頸部での調整手法	(226)
第四章 総体療術の常用腧穴.....	(227)
第一節 上肢部での常用腧穴.....	(228)
一、手の三陰経での常用腧穴	(228)
二、手の三陽経での常用腧穴	(229)
第二節 下肢部での常用腧穴.....	(233)
一、足の三陰経での常用腧穴	(233)
二、足の三陽経での常用腧穴	(234)
第三節 頭頸部での常用腧穴.....	(240)
一、陽明経での常用腧穴	(240)
二、少陽経での常用腧穴	(240)
三、太陽経での常用腧穴	(242)
四、督脈と任脈での常用腧穴	(242)
第四節 胸腹部での常用腧穴.....	(243)
一、任脈と足少陰腎経での常用腧穴	(243)
二、足陽明胃経と太陰脾、肺経での常用腧穴.....	(246)
三、足少陽胆経と足厥陰肝経での常用腧穴	(247)
第五節 腰背部での常用腧穴.....	(248)
一、督脈での常用腧穴	(248)

二、足太陽膀胱経での常用腧穴	(249)
三、手太陽小腸経での常用腧穴	(251)
四、手少陽三焦経での常用腧穴	(252)

第四篇 臨床調整の実際 (254)

第一章 外科の疾患.....	(254)
一、腰椎間盤ヘルニア症	(254)
二、腰の急性ねん挫	(256)
三、慢性腰痛	(258)
四、頸部脊椎症	(261)
五、寝違え	(264)
六、肩凝り	(265)
七、上肢の関節の損傷	(267)
八、橈骨茎状突起狭窄性腱鞘炎	(271)
九、下肢の関節の損傷	(272)
十、腹部手術の後遺症	(277)
十一、きずあとのはんこん	(279)
第二章 内科の疾患.....	(280)
一、感冒	(280)
二、胃下垂	(282)
三、慢性胃腸炎	(283)
四、胃及び十二指腸潰瘍	(285)
五、胆激痛	(288)
六、陰閉(尿潴溜)	(290)
七、喘息	(292)
八、高血圧	(295)
九、リュウマチ病	(297)
十、肥満症	(298)
十一、便秘	(299)
十二、疲労すぎ	(301)
第三章 神経内科の疾患.....	(304)
一、神経衰弱(不眠症)	(304)
二、頭痛(偏頭痛を含む)	(305)
三、半身不随	(307)
四、顔面神経マヒ	(310)

第四章 婦人科と小児科の疾患.....	(311)
一、閉経	(311)
二、月経痛	(313)
三、小児消化不良	(315)
四、小児肘関節脱臼	(316)
五、小児栄養不良	(317)

第一篇 総体療術の基礎理論

本篇では総体療術の基礎理論について紹介した。内容は六の章に分けられる。第一章から第三章までは中医学基礎理論の中で一番関係するもの、即ち、陰陽学説、臟腑学説、経絡学説などについて紹介した。第四章から第六章までは現代医学の基礎理論の一番関係するもの、即ち、人体の外形、部位と骨格系；人体の筋系；人体の脊髄神経と自律神経系などの内容を選んで別々に述べた。又、勉強の便利を図るため40幅以上の図と表を付記し込んだ。

第一章 陰陽学説

陰陽学説は陰陽及びその相互関係を研究する古代の哲学思想であり、その基本的な内容は陰陽とその相互関係との二つの方面がある。

第一節 陰陽の概念と相互関係

一、陰陽の概念

陰陽とは自然界において互いに関わりながら対立する事物と現象の両側に対する概括である。それが関わりながら対立する二つの事物に代表することもできるし、また、同一事物の内部に存在する互いに対立する二つの側面にも代表することもできる。自然界には、互いに関わりながら対立する事物と現象は沢山ある。例えば、天と地、日と月、火と水などはその類である。そういう各々とも自然界に存在し、互いに関連しながら対立する事物なので陰陽で概括できる。その中に天や日や火などを陽で、地や月や水などを陰で概括できる。また、春夏と秋冬、暑いと冷たい、明るいと暗い、機能的なものと物質的なもの、動くことと静かなこと、昇ることと降りること、外へ向かうこと内へ向かうこと、興奮と抑制などは皆互いに関連しながら対立する現象に属する。故に陰陽でそれを概括することができるわけである。陰陽で事物と現象を概括する場合には、果たして、どちらの方を陽とし、どちらの方を陰とするか、それは決まった規律に基づいて決めるのである。普段、活動的なもの、上昇的なもの、外在的なもの、温熱的なもの、明顕的なもの、機能的なもの、

亢進的なもの、興奮的なものの方はいずれも陽で代表できる。つまり、陽に属するものであるが逆に静止的なもの、下降的なもの、内在的なもの、寒冷的なもの、暗くて不明瞭的なもの、衰退的なもの、抑制的なものの方はいずれも陰で概括できる。この規律に基づいて前述の例を纏めて、次の表のように示す(表 1.1-1)

表 1.1-1 事物の陰陽属性の分類

分類	空間	時間	季節	性別	温度	重さ	明るさ	事物の運動状態			機能活動状態	
陽	天	昼	春夏	男	熱	軽	明るい	上昇	外向	明らかな運動	興奮	亢進
陰	地	夜	秋冬	女	寒	重	暗い	下降	内向	相対的な静止	抑制	衰退

二、陰陽の相互関係

陰陽の相互関係は四つの方面を含む。つまり陰陽の対立と互根と消長と転化の四つの方面である。

(一)陰陽の対立:陰陽の二つの側面の相互制約しながら闘争するのを陰陽の対立という。

陰陽の両方は互いに敵対する性質をもって、また、両方とも、自身的一方を強めようとし、相手の力を弱めようとする傾きと力をもつ。つまり、陰の一方は陽を制約し、陽の一方も陰を制約するというような関わりをもつ。陰陽の間の対立闘争は事物の発展と変化を推進める原動力であると陰陽学説では考えられる。陰陽の対立闘争が相対的なバランスを取ることは「陰平陽秘」(陰平らかにして、陽秘なる)と称される。それは人体の生命活動の正常を示すものである。もし陰或は陽のどちらの一方が衰えたら、必ず他の一方の相対的に盛んになることを引き起こすに違いない。それは一方の不足によって、相手に制約しすぎたわけである。陰陽の偏衰と偏盛のいずれも、陰陽の相対的なバランスがくずれた状態である。このような陰陽の対立闘争の考えは、腹部総体療法では生理と病理及び治療などの各方面で広く応用されている。

(二)陰陽の互根:事物の陰陽両方が互いに依存し合うことを陰陽の互根と言う。陰陽のどちらの一方も他の一方を離れて単独に存在することはできない。例えば、上は陽に属し、下は陰に属する。上は無ければ下もなくなり、下はなければ上もなくなる。熱は陽に属し、寒は陰に属する。熱は無ければ寒もなくなり、寒は無ければ熱もなくなる。実は陽に属し、虚は陰に属する。実は無ければ虚もなくなり、虚はなければ実も無くなる。人体の生理に結びつけて言えば、陰は物質を指し、陽は機能を指す。物質は体内にあって機能を生じる基礎である。機能は外に表れて、内にある物質の運動表現である。陰は陽に依存して、陽は陰に依存するので「陽は陰に根ざし、陰は陽にねぎす。陽なくば則陰もって生ずることなく、陰なくば則陽もって化すことなし」(《医貫砭・陰陽論》)などの言う方がある。

(三)陰陽の消長:消とは沈み、弱くなるのであり、長とは上がり、強くなる意味である。陰陽の両方は互に対立するので、絶えずどちらかが弱くなったり、強くなったり、繰

り返し、一定の枠内に於いて変わっているがこのような一定の枠内で陰陽の両方の変化を陰陽の消長という。大自然の気候の変化については暑いことを代表する陽気と寒いことを代表する陰気の二つがある。陽気と陰気との闘争によって、陰陽の消長の変わりを生じる。もし、陽気が強くなると気候が暖かくなるが、逆に陰気が強くなると天気は寒くなる。冬、陽気が弱い陰気が強いので天気は寒いわけである。冬から春及び夏にかけて、陽気がだんだん強くなっていくが、陰気がだんだん弱くなっていくので天気は寒い方から暑い方へ変化してくる。これは「陰消陽長」の過程である。夏、陽気が盛で、陰気が弱いので、天気は暑いわけである。夏から秋及び冬にかけて、陽気はだんだん弱くなっていくが陰気はだんだん強くなっていくことにしたがって、天気も暑いほうから寒い方へ変化していく。これは「陽消陰長」の過程である。

人体について言えば、機能活動は陽に属して、栄養物質は陰に属する。機能活動を生じる過程に於いては、必ず一定の栄養物質が消耗されるに違いない。これは「陽長陰消」の過程である。これに反して、各種の栄養物質の新陳代謝の過程に於いて、また、一定のエネルギーが消耗される。これは「陰長陽消」の過程である。

ただし、陰陽の消長は一定の枠内に行うことに限る。この枠内に行われる消長は、正常な消長であるが、もしその消長がこの枠を越えたら、陰陽のバランスが崩れたことに至る。その中にも、陰陽のいずれの方が強すぎる。しかも、このような状態が自ら調整されなくなると陰陽の偏勝という状態になる。もし、陰陽のいずれの方が弱すぎたり、しかもこのような状態が自ら調整されなくなると、陰陽の偏衰という状態になる。

陰陽の偏勝とも、偏衰とも、皆な陰陽失常に属するが、陰陽のバランスがくずれたことに属するのである。

要するに、大自然と人体の複雑な発展と変化に於いて陰陽消長の過程を含む。この過程は陰陽両方が互いに制約し合うことによって生じられ、また一定の枠がある。もしこの枠を越えると、大自然では異常現象を、人体では疾病を起こすようになったと認められる。

(四)陰陽の転化：陰陽の両方は一定の段階に達すると、互いに転化し合うことを陰陽の転化という。

陰陽の両方は互に対立することによって絶え間なく、一定の枠内に消長の変わりを行われているが、このような消長の変わりは枠を越えたら、偏勝とか、偏衰とかが発生するようになる。陰陽の偏勝が続いて発展して、極点に達すると、互いに相手の方に転化しあうことができる。例えば、陰は極点に発達したら、陽に転化し得る。寒はトツプレベルに発達したら、熱の面に転化し得る。これを「重陰必陽」（陰を重ねば必ず陽）と「寒極生熱」（寒極まれば熱を生じ）という。また陽は極度に発達したら、陰に転化し得る。これを「重陽必陰」（陽を重ねば必ず陰）と「熱極生寒」（熱極まれば寒を生じ）という。

重陰必陽

寒極生熱

第二節 陰陽学説の中医学における応用

上に述べた通り、総体療術は漢方医学に属するものである。陰陽学説はこの総体療術の各方面に貫ぬいていて、以って人体の臓腑、器官、組織や生理機能や病理変化などを解釈し、また臨床の診断と治療も導く。

一、人体の臓腑、器官、組織の解釈

人体は一個の整体であるがそのあらゆる組織構造は陰陽の二つの側面を用いて分析することができる。

一般は上部は陽に属し、下部は陰に属する。体表は陽に属し、体内は陰に属する。そしてまた体表もわかる。背面が陽に属し、腹面は陰に属する。体内の器官も臓と腑に分ける。六腑は陽に属し、五臓は陰に属する。また臓腑内部にも陰陽に分けることができる。例えば心には心陰(心臓の血液と津液を指す)と心陽(心臓の機能と君火を指す)、腎には腎陰(腎臓の精血と水液を指す)と腎陽(腎臓の機能と命門火を指す)があるなどである。人体の基本物質である気と血を陰陽に分けると、気は陽に属し、血は陰に属する。人体の経絡を分けると背面及び四肢外側を循行するものは陽経であり、腹面及び四肢内側を循行するものは陰経である。

二、人体の生理機能の解釈

人体の機能活動は陽に属するがそれが物質をもって基礎とする。逆に、物質の代謝はなければ、機能活動の源もなくなる。逆に機能活動の結果は物質を化生する過程を推し進めているので、機能活動はなければ、物質の代謝を行うことは、それについてできないようになる。いわば「陰が内にあると、陽の守なり。陽が外にあると陰の使なり」(“素問、陰陽応象大論”)である。「陰は内にあるとは物質が体内にある意味である」。「陽が外にあり」とは機能が外に表われる意味である。「陰が内にあり、陽の守なり」とは、内にある物質は機能を生じる物質的な基礎であり、「陽が外にあり、陰の使なり」とは、外にある物質は機能活動が、内にある物質の運動の現れとの意味である。このような体内の陰陽バランスを取る状態を「陰平陽秘」という。つまり人体の正常な生理状態である。

人体の各種の生理活動は昇、降、出、入の四種の基本的な運動形式に帰納される。これによって体内の気血と臓腑と経絡の間の相互関係を解釈し、陰陽の属性から、陽は昇と出を主り、陰は降と入を主ると分類している。陽は体内の輕清の気であり、清竅に上昇し、皮膚と肌表に外出し、四肢を充実している。陰は体内の比較的な重濁な気であり、その精微は五臓の内流し、全身を充養し、その糟粕は便によって体外に排出される。人体の陰精と陽気との運動過程に、陰陽の昇、降、出、入の陰精と陽気との矛盾な運動過程に、陰陽の昇、降、出、入の過程ともいえる。昇、降、出、入が正常であれば、正常な生命活動を現わすが、昇、降、出、入が異常になると、異常な生命活動をも現われる。

三、人体の病理変化について